

令和7年度第1回防災プロジェクト会議

日 時	令和7年9月2日（火） 午後2:00～午後4:00
場 所	アミューあつぎ5階 ルーム504
出席者	防災関係者、民生委員・児童委員、厚木市社会福祉協議会、厚木市障害者福祉事業所連絡会 井泉憩の家、(特非) ゆうかり 障害者地域活動支援センターレザミ工芸、(株) BISCUSS 生活介護 ajito、(社福) 野百合会 相談支援事業所 まゆみ、(社福) すぎな会生活ホーム、厚木市障がい福祉課、厚木市障がい者基幹相談支援センター  (敬称略)

## 1. 開会

### 総合司会 厚木市障がい者基幹相談支援センター

- ・資料確認（次第、名簿、事業計画、神奈川工科大学の共催研修の資料及びアンケート、地域と繋がるためのフロー図、避難行動要支援避難計画（個別書式、記入例）
- ・委員挨拶（出欠確認）
- ・本年度の事業計画について（防災プロジェクト事業計画参照）

防災対策チェックリスト改定版の周知については、プロジェクト委員の民生委員と社会福祉協議会の方で、3月3日の民生委員の会長会で防災対策チェックリストのチラシを15部配布し説明をした。民生委員300名へチラシを配布する了解が得られて、令和7年度4月以降に配布してもらう予定になっていたため実際はどうか。確認していく（4月の定例会で配布した）。今後も周知を進めていく。

### 議事進行 （社福）すぎな会生活ホーム

## 2. 議題

### (1) 神奈川工科大学共催による研修会等の振り返りについて

#### 厚木市障がい福祉課 報告 アンケート結果参照

令和4年度から神奈川工科大学と共催で取り組んでいる防災対策チェックリストの作成研修であるが、令和7年7月17日（木）の午後に開催した。出席者は合計20名で当事者8人、支援者8人、事務局4人であった。トライフィールドわーくあーつ（就労継続支援B型）、アジール（地域活動支援センター）、GH ソシオ厚木（共同生活援助）、まんまんハウス（共同生活援助）、相談支援事業所立志（相談支援センター）、厚木市社会福祉協議会にご参加いただき、研修を行った。施設見学の後、防災対策チェックリスト作成研修を行った。今回は事前に、防災対策チェックリストの作成をしておいていただき、当日は、書き方の説明や意見交換などを行った。

アンケート結果にもあるように、「実際に神奈川工科大学の施設を見学して、いろいろと見られて良かった」、「実際、チェックリストを作成してみて、チェックリストはこういう物なのかと気づきがあった」等のご意見をいただいた。

防災対策チェックリストの作成場面では、紙媒体の地図やHPに掲載されているデジタルマップがあり、自分の住んでいる地域が水害でどのくらい水没してしまうのかなどを見ながら、自分がどこに避難すべきか、避難しない方が安全なのかと個別に質問をいただいた。市の避難施設が土砂災害警戒区域にあるなら、避難場所に行くよりも、自宅にいた方が良いのではないのかというような話もさせていただいた。障がいがあるなしに関係なく、どの時点で避難すべきなのかという質問を何点かいただいた。実際の状況にならないと、どの時点で避難所が開設されるかわからない。その時々で変わるものもある。また、防災対策チェックリストそのものについては、当

事者一人で作成するのが難しかったようであった。支援者をお願いしたいことを自分が思いついて書くのは難しいため、支援者と一緒に作成していたものが多かった。

**意見交換**

・施設の中で、災害時を想定した場所や設備が、災害対策本部、ボランティアの拠点になっているところと細かく決められている。実際災害にあった時にしっかり機能するようになるのかと思った。防災対策チェックリストがあることで、実際の時に落ち着いて対応ができると思った。(厚木市社会福祉協議会)

・明日、事業所で防災訓練を行う。防災対策チェックリストの再確認と課題になったお話を皆に伝えていく。防災対策チェックリストを一人ではなかなか書けない。支援者がついて一緒に行う。防災対策チェックリストも改定されるので、何回か書き直している。今年また、再確認したい。(レザミ工芸)

・当事者の方は、一人で書ける方もいるが、目が不自由であったり、能力的に書くことがあまり得意でない方もいる。避難所についても自分がどこの学校に避難する、どこに行ったら良いというのがわかっていないため、そういう意味では、防災対策チェックリストを作成することは、きっかけにはなる。どこで災害があるかによる。事業所で皆が揃っているときであれば良いが、通所の送迎途中で、地震や水害などのいろいろな場面がある。自分の確認という意味で、定期的に防災対策チェックリストの作成をしてもらおうと良いと思うが、実行できていない。配っただけでは、作成してもらえないため、改めて時間を作って作成していかないとなかなか難しいと思う。(生活介護 ajito)

・どこに避難するかわからないという話を聞いていて、「あなたの避難場所はここですよ」と防災対策チェックリストに書いておくといいのかなと思った。(すぎな会生活ホーム)

・生活介護 ajito の利用者は、車椅子なので、指定避難所に全てトイレが整っているわけではない。環境面で整えていくことは、すぐにできるわけでもない。難しいなと思った。(生活介護 ajito)

・利用者は、能力的な問題はもちろんあるが、グループホームの支援者は、指定避難所がどこにあるか知っているのか。厚木市の指定避難所は、40～50 近くある。支援者がよく知っていないと利用者に周知できない。(防災関係者)

・グループホームなどは、社会福祉法人だと本体に避難しましょうということになる。在宅の方が一人で避難しましょうというところが一番大きな問題である。(すぎな会生活ホーム)

⇒来年度は、今年度同様、参加者に事前に防災対策チェックリストを配布して、研修を行っていきたい。対象者に関しては、就労継続支援B型、共同生活援助（グループホーム）で前年度までに参加経験のない事業所（神奈川工科大学での防災対策チェックリスト作成研修資料参照）（基幹）

・最近、しふくれん（厚木市障害者福祉事業所連絡会）に加入していない株式会社の事業者が増えた。軽めの精神、発達で、家から事業所まで、支援がついているところがあるので、より防災のニーズが高いと感じている。

⇒しふくれんに入っているかいないか確認しながら、参加を募っていききたいと思う。(基幹)

⇒この研修を行う前に、神奈川工科大学と打ち合わせをする。大学から、この取組は、意義のある取組だと言われたが、防災対策チェックリストを作成した後どういう風に障がいのある方の生活に活かされているのかと同時に検証して欲しいとの課題提起があった。来年度もこの取組を続けるが、そういうところも含めて来年度の取組を考えてもらいたい。アンケートをしたり、事前に意見を聞いたり、事業所の中でブラッシュアップしているとか、事業所の防災訓練の中で、防災対策チェックリストを持ち合わせて作成しているという事でも良い。作ったらそのままというところでは終えないでほしいというところ

が大学からのご意見であった。(基幹)

・これは、伝えたい情報である。聞きたい情報を活かせるような時がないと改善にも限界がある。防災対策チェックリストを知ってもらわないとそういった意見は出てこないが、支援者は慣れているが、一般の人には、当事者が何がわからなくて不安なのかわからない。

防災対策チェックリストをそういうところにも活かせると良い。(井泉憩の家)

⇒こちらが伝えたいと思って作成したチェックリストが実際情報を受け取る側は、本当に聞きたい情報なのかと言うところだと思うが、どう検証したら良いか。(基幹)

・去年の8月末の大雨に伴い、厚木市では避難所を開設した。小学校の避難所に夜通しいたが、実際に避難所に来られた方で、防災対策チェックリストを持って来られた方がいたとして、障がい福祉課としては、防災対策チェックリストを普段から見ているため、伝える必要があることが書かれてあり、理解できる。しかしながら、何の前提知識もない中で、これを当事者が避難所の職員に手渡しで渡した時に、実際にどこまでこれを元に、避難所の職員が支援等をできるかというものは、実際そういった事例が発生しない限り想定が難しい部分もあるのではないかと思った。実際の現場をどこまで想定してチェックリストを作成していけるかところが今後の課題であると考えます。(障がい福祉課)

・それを模擬的に行うのは難しいのか。(井泉憩の家)

・実際の防災訓練などが想定される。(障がい福祉課)

・熊本とかの自治会の話が聞けると良い。場合によっては、Zoomで繋いでどうか。

(井泉憩の家)

・そういった場合に、利用者との意思の疎通が難しいと思う。避難所の各委員は、行政2人、自治会長、民生委員、単位自治会から防災推進委員を含めて、24、25人である。実際に避難所を運営する人たちに行政で研修の場を設けて行う。去年の能登半島の地震時に実際に東京から支援に行った若者と荻野公民館で80人位集まって研修会を行った。実質体験をした人からだといろいろなことがわかる。実際地域ごとにそういう人を招いて研修を行い、福祉の方と意見交換をすると、いざと言う時に少しは、気持ちがわかるのではないか。完全な受け入れはできないが、ある程度わかり会えるのではないか。

## (2) 障がい者が地域と繋がり、地域の防災訓練に参加しやすくなるための取組について

厚木市障がい者基幹相談支援センター(資料:地域のお住まいの方々のつながりについてのフローチャート参照)

地域活動支援センターのネットワーク会議に出席している自治会長が障がい理解があり、自治会地区にお住まいの障がい者と繋がりたいと協力的なご意見をいただいた。その自治会員でその地区にお住まいの障がい当事者と地区の相談支援センターに、ご協力をお願いし、防災対策チェックリスト、厚木市避難行動要支援者避難支援計画を作成し、地区の自治会長、民生委員等地域の方とお会いする場を設けて、障がい当事者と地域とを繋ぐ取組を始めたところである。個別の対応、取組になる。

### 意見交換

・厚木市避難行動要支援者避難支援計画の作成対象者が男性1人、女性1人の2人いる。市の主管課に提出した。同意を得た上で作成した。今回の避難訓練の時は、一人は年配、一人は足が悪くて来られなかった。参加はできないが、実際の厚木市避難行動要支援者避難支援計画を作成することは、いいことだと思う。いざ災害になった時に、個別にわかっていると助けるのも早い。民生委員と自治会で共有していて、民生委員を自治会の常任役員にして、オブザーバーにしている。地域の中は別ではないので一緒に活動する。常に情報共有している。行政の方で、避難行動要支援者避難支援計画書式を作成していただいて、見守りに役立って

いる。(防災関係者)

・この場で何かができるということではないが、障がい当事者の方で自治会に入りたいと思う方が入るのが、一番である。しかし、経済的な理由で会費を出すのが厳しい人もいる。防災訓練の時に、要支援者に費用を支払って招待する。チェックリストを実際利用しての訓練もできる。対応する人の訓練にもなる。補助金などつけてもらえると良いと思った。顔の繋がりもできるので、一石三鳥である。(井泉憩の家)

・現時点では難しい。(障がい福祉課)

・市から直接にお金を障がい当事者に支払うのではなく、こういった訓練をすることで自治会に補助するとなる。(井泉憩の家)

・防災訓練に参加することがゴールではない。本当に災害が起きた時に、どうするかが重要である。その前段階の準備において、防災対策チェックリストが活用できる。例えば、この小学校は地震の時は良いが、風水害はダメだという気付きが生まれる。さらに、実際この場所に一人で行けるのかというような話も出てくる。一人で行けない時に力になってくれるのが、普段世話になっている支援者や、近くに住んでいる知り合い、そして自治会員の協力であったりする。その点の気付きを把握できるということが、防災対策チェックリストの役割の一つであると考ええる。しかしながら、自治会などにどのように顔を繋いでいくのが難しい。市としては、ちょっとしたイベントであったり、防災訓練への参加もしていただきたいと思っている。そのような部分について、一人一人、少しでも前に進めればと考えて取組んでいるところである。(障がい福祉課)

・参加となるとなかなか難しいが、招待するとなると呼ぶ側も自分で避難所にたどり着けないようなら配慮しなければならない。避難所に行けなくて困っている人の協力ができる。一人か二人招待することで、配慮しなければならないことがよくわかると思う。(井泉憩の家)

・防災訓練の内容は、自治会単位で一覧があり、去年見た様子では、障がい者と一緒に行う防災訓練をしている自治会もあった。(障がい福祉課)

・避難所単位の訓練があるのか。(井泉憩の家)

・避難所単位の訓練はないが、避難所運営委員会の集まりはある。2年前に一度、防災対策チェックリストの周知を危機管理課経由で行ったことがあった。(障がい福祉課)

・防災訓練に参加した総数のうち、障がい者、小学生、中学生の数を記入するところがある。実態を捉える意味で大事なことである。昨年は、大雨で防災訓練は延期になった。実際に213件の自治会のうち、実際に実施したのは、60近くである。なぜかという、防災訓練に対して、危機意識が弱い。厚木市は、我々を含めて、自然災害が少ない地域である。災害は、いつ起こるかかわからないし、隣の伊勢原市は、大きな断層があり、地震が来たら震度7ぐらいになり、厚木市も大変なことになる。覚えている人もいるが、知らない人もいる。知らない人に教えるために、我々が常に話をする。皆で情報共有できると良い。(防災関係者)

・つながりについてだが、繋がりたくない方がいるのではないか。どうして繋がりたくないのかという理由や当事者の本音を知った方が、何か役に立つのではないか。(まゆみ)

・グループホームに入居していると、グループホームの職員が当番だから一緒に活動に参加したり、避難訓練にこの間行っただけと言っていた。掃除に参加しないと罰金制の自治会もあり、お金を取られたくなかったら掃除をしてというルールのあるところもある。個人で住んでいる利用者は、参加はしている。レザミ工芸の地区の自治会長に、避難訓練をするのかと聞いてもはっきりしないし、お誘いを受けたこともない。気持ち的に障がい者を受入れないという自治会長も0ではないので、全部が全部、防災関係者のような自治会ばかりではない。レザミ工芸で行う避難訓練は、地域の方は、みんな来るが、自分達の避難訓練には、呼ばない。(レザミ工芸)

⇒だからこそ、地域の方も障がい者も「どちらともいいよ」と言ってくれないとできない取組であるが、小さいことから、行っていこうと思った。

- ・自治会長は87歳。周りは皆高齢者で高齢化している。何かあった時には、利用者さん手伝ってもらえるかしらと逆に言われる。レザミ工芸では、知ってもらえているが、家に帰れば、どういう付き合いをしているのか、明日、今言われたことを再確認して、自治会と本当に繋がっているのか聞いてみる。自治会長の名前がわかる人もいれば、わからない人もいる。(レザミ工芸)

- ・野百合園のグループホームもあり、野百合園の運営委員も頼まれている。常に繋がりを持っている。今回の祭りでもテントを二張りと発電機を借りた。物品の貸し借りではないが、そういう物で繋がるとか、お祭りに参加するとかし、いざという時には、繋がりが大事である。平常時においても顔の見える付き合いが一つの縁と繋がる。(防災関係者)

- ・障がいの精神は、道を歩いていても誰とでも話せるが、障がいにより、受け入れないとか、ご近所の方にも、最初の頃は、苦情を言われたり、受け入れないと言われたりした。障がいも精神、知的、身体とそれぞれ違うので難しい。知的や身体の方たちは、世の中も認めているし、手助けすることも拒まないけれども、精神障がい者は、なかなか難しい。

(レザミ工芸)

- ・我々健常者として、ハンディキャップがある精神、身体の方が、当事者として、視線を合わせる。共生社会として人権を鑑みて、こちらも視線を合わせる努力をすることが大切だと思う。(防災関係者)

### (3) 厚木市避難行動要支援者避難支援計画（個別計画）書について

厚木市障がい者基幹相談支援センター（資料：厚木市避難行動要支援者避難支援計画（個別計画）書）

今までは、厚木市避難行動要支援者避難支援計画（個別計画）書については、対象となり、同意者に対して、自治会と民生委員が自宅訪問をして、厚木市避難行動要支援者避難支援計画（個別計画）書を作成していたが、昨年より、同意者がご自身で計画書を作成し、市役所に提出することになった。どのような書式が情報共有したい。

#### 意見交換

- ・厚木市の障がい者は、手帳を取得していて、等級の重い方である。身障1、2級、療育手帳A1、A2（家族不在）、精神1級である。

⇒対象者が作成できない場合は、支援者がサポートをすることになっている。ここにいるプロジェクト委員は、作る側に回る可能性がある。その時に、『見たことはありません。作成したことはありません』とならない様に、事前に触れておくことが必要なのかなと思い提案させていただいたテーマである。これが進んで、地域と繋がりたいという障がい者がいれば、この厚木市避難行動要支援者避難支援計画（個別計画）書を自治会長や民生委員に持って行くことで、顔が繋がることできる。対象は少ないので、一気に繋がることはないが、地域で積み重ねて行くといいかなと思っている。地域と繋がることは、コロナ前から行っているが、実感もないし、広がりもない。この取組は、年単位で少しずつ広がっていく取組だと思う。一人でも二人でも繋がっていければ良い。このプロジェクトの中で、実際当事者と避難支援計画（個別計画）を作成したり、個人情報に気になるなら、架空の事例で作成してみてもどうか。(基幹)

- ・主管課は、介護福祉課になっている。登録したい方や代理人の方から、直接介護福祉課に問い合わせをして頂く。書式に載っている地図も介護福祉課の方で、住所から地図を調べて掲載している。(障がい福祉課)

## 令和 7 年度第 1 回防災プロジェクト会議

- ・現在、地域包括支援センターが 10 ヶ所あるが、何をやっているのか、実態がつかめない。何をしているところか。(防災関係者)
- ⇒基本的には、地域の相談窓口である。高齢に限らず、障がい者も人権、お金と幅広く相談にのり、地域の関係機関と連携して支援をしていく。(障がい福祉課)

### (4) その他

#### ○次回のプロジェクト会議の議題について

- ・災害ボランティアセンターに関する受け入れや仕組みなどについて。
- ・神奈川工科大学共催による研修会等の振り返りについて、今までの参加者に、アンケートを実施することについて。
- ・厚木市避難行動要支援者避難支援計画（個別計画）書の作成研修は行わない。

#### ○今後の研修として

- ・被災者の話を研修として聞きたい。受け入れた側の困ったこと。知っていた方が良かったことなど伺いたい。熊本地震など。(井泉憩の家)

- 地域住民が高齢化しており、避難所運営をしていくにあたり、若い中学校の生徒に協力依頼をするため、研修を予定している。10 月 2 日に指定避難所の防災倉庫を開ける予定である。(防災関係者)

以 上